

出身 中学	中学校 番号	受験 番号	氏名
----------	-----------	----------	----

得点	60点
----	-----

一 問一 ア、ウ、オ<sup>2</sup> (順不同、完全解答)

10点 問二 ② 上の雪と中の雪が積もつて<sup>10</sup>いる<sup>15</sup> からである。

③ 上の雪と下の雪で視界<sup>10</sup>が遮られて<sup>15</sup>いる<sup>20</sup> からである。

問三 イ<sup>2</sup> (別解) 上の雪と下の雪によつて、外界と接することができない

三 問一 倒産<sup>1</sup> トウサン 2 荒廃<sup>2</sup> コウハイ 3 驚いた<sup>3</sup> オドロ 4 加減<sup>4</sup> カケン 5 揺れて<sup>5</sup> ユ 各1

20点 問二 目頭<sup>2</sup> 問三 野球場の匂い<sup>3</sup> 問四 イ<sup>3</sup>

問五 父に対するあこがれ。<sup>3</sup>

問六 野球を教えたことが屋外への興味を抱かせ死<sup>4</sup>を早めることになつたが、親として生きる実感<sup>4</sup>を伝えられたことに満足しているから。

三 問一 エ<sup>2</sup> 問二 ② もうけて<sup>1</sup> ③ かきはらい<sup>1</sup>

10点 問三 夫が他の女性に心がわりして、家の中のものを<sup>2</sup>すっかり持つて行つたから。

問四 イ<sup>2</sup> 問五 ア<sup>2</sup>

四 問一 ひがん<sup>1</sup> 彼岸 2 そうぐう<sup>2</sup> 遭遇 3 きが<sup>3</sup> 肌紙 4 おおい<sup>4</sup> 覆 5 ぎじ<sup>5</sup> 擬似 各1

20点 問二 個人が属している共同体が信じているもの<sup>2</sup>

問三 個人が人生の意味を考えなければならず、その<sup>4</sup>都度自分の無知や弱さを見せつけられて、不安になること。

問四 A 才<sup>1</sup> B エ<sup>1</sup> C イ<sup>1</sup> 問五 幸せ<sup>3</sup> 問六 言つて<sup>3</sup>

□ 詩

問一 詩の表現技法を確認する問い。各連の一行目、二行目、三行目が対応していることから対句法、各連の二行目と三行目との間で倒置法、雪に対して「何百人」「さみしかるな」と表現している点から擬人法が用いられていることがわかる。なお、そのほかに、各連の一行目は「雪」で終わっており、体言止めである。

問二 ②「何百人ものせていて」を説明し直す。「自分の上に上の雪と中の雪が積もっている」から、下の雪は「重かるな」なのである。

③「空も地面もみえないで」を説明し直す。「上の雪と下の雪が視界を遮っている」から、中の雪は「さみしかるな」なのである。

問三 詩の主題に関する問い。「上の雪」も「下の雪」も「中の雪」も、それぞれに「つめたい」「重い」「さみしい」という不幸を抱えている。そして、その不幸はそれぞれ他の雪によってもたらされている。例えば「上の雪」は、中の雪と下の雪がもぐりこんでいて外界と接しなければならず冷たい思いをしているが、自分がいるために下の雪は重いし、中の雪を外界から遮ってしまっている。事情は他の雪にしても同じである。このような意図的ではない、存在しているだけで引き起こしてしまう罪、そのような罪を引き起こしてしまう存在の悲しみを、この詩は気付かせてくれる。金子みすゞの詩は、一見平明だが、このような観点で読み直してみると、意外な広がりや深さを持つていることに気付かされるであろう。

□ 小説

問一 漢字の書き取りの問題。トメやハネに気を配り、丁寧に書くことを心がけよう。

問二 体力のない息子が精一杯投げにくる姿に、心を打たれて目に涙が浮かんでくる様子の表現である。本文の前半に「胸が熱くなる」という同類の表現がある。慣用的な表現を理解し、使用できるよ

にしよう。

問三 問題の空欄直前にある「鼻を鳴らす」とは、慣用的には「鼻にかかった声を出す。また、甘える様子」であるが、この場面では甘えるような仕草で匂いを感じようとする様子と読み取れる。本文の前半部分に「草の匂い」を「仔犬のように鼻を突き出し」て感じようとする描写があり、生命の躍動感にあふれた匂いを「野球場の匂い」と表現している。

問四 香津子の心情に関する問いである。英治を心配する過保護な母親の姿が読み取れる。また、夫が英治に野球を教えることに反対し、不機嫌である様子も描かれているため、答えは「イ」。アは「落胆」が不適当。ウは自分から離れていくことへの動揺は本文中には描かれていない。また、エは「夫の思いを理解しながらも」の部分不適当である。

問五 英治の心情に関する問いである。野球をする父の姿を真似る様子から、父にあこがれ、英治が野球を通して生きる喜びを感じている。

問六 京治の心情に関する問いである。間違いと指摘されることと、間違いではなかったと考えている根拠の二点を含めて作文する。野球を教えたことが青空の下へ出て死期を早めてしまったことと、親として息子が知れたがった世界を教えてあげられたことに対する満足度の二点である。京治が伝えたく、英治が知れたがった「何か」は、冒頭の英治の言葉から、生きていることの喜びや実感と考えられる。野球を教えることを通して、野球の躍動感や植物の生命力を感じさせ、息子の生き生きとした姿を見られたことに喜びを感じている。

□ 古文

(現代語訳) 下野の国に(ある)男と女が住み続けた。長年住んでいた間に、男は別の女をこしらえてすっかり心変わりして、二人の住んでいた家にあつた物を、新しい妻の所へ洗いざらい持って行った。(もとの妻は)情けないことだと思つたけれども、それ

でもなすままにまかせて見ていた。(男は)ほんのちよつとの物も残さず全部持つて行った。ただ残った物と言えば、飼馬桶だけであつた。それを、(男は)自分の召し使つてゐる従者、真楯といふ名の童を使いとして、この飼馬桶までも取りによこした。その童にもとの妻が言った、「お前ももうこれからここへは来ないのだからね。」などと言うと、(童は)「どうしてお伺いしないことがありましよう。御主人様はいらっしゃらなくてもきつとお伺いしましう。」などと行って、立つていた。もとの妻は、「だんな様にお便り申し上げたなら(あなたは)たしかに申し伝えてくれますか。手紙は決して御覧にならないでしう。(だから)口で申し上げなさい。」と言うと、「たしかにきつとお伝え申し上げます。」と言つたので、(もとの妻は)次のように言った、

「(夫の名残の)飼馬桶も行ってしまふ。(橋渡し役の召し使いの)真楯ももう見ることはできないだらうよ。今日から(私は)このつらい世の中をどのように過ごしたらよいのでしうか。」

と申し上げなさい。」と言つたので、(童が)男に伝えたところ、あの家財道具を洗いざらい持つて行つてしまつた男は、そつくりそのまま(持ち出したとおりに)運び返して、以前のようにほかの女に心を移すこともなく二人仲良く暮らしたそつだ。

問一 古文において「年ころ」は「長年、数年」という意味になる。重要語なので、押さえておくと良い。

問二 歴史的仮名遣いから現代仮名遣いへあらためる時のパターンを押さえる。

問三 本文一行目と二行目「男妻まうけて心変はり果てて、この家」にありける物どもを、今の妻のりがりかきはらひもて運び行く」がその答えに当たるので、これを現代語訳して、文末を理由を説明する時に用いる「……から」の形にすればよい。

問四 ⑤は、「真楯といひける童」に「ふね」を「取りにおこせ」た人物なので、「男」になる。

④は、もとの妻が詠んだ「ふねも去ぬ……」という和歌を「男」に伝えた人物なので「真楯といひける童」になる。

問五 「男」はもとの妻が詠んだ「ふねも去ぬ……」の和歌を「真楯といひける童」から聞いて、もとの妻のところに戻つてゐる。すなわち、和歌によつて女の本心がわかつたからである。

#### 四 評論

問一 漢字の読みの問題。音や訓を意識して覚えよう。

問二 傍線部を含む段落以降で、「かつての宗教」、すなわち近代以前の宗教の性質について様々な記述がされているが、筆者が宗教の語源について述べている五段落目に、十九字で説明されている箇所があり、そこが正解となる。

問三 傍線部を含む一文をよく読む。近代以降の人びとの、信仰の覆いはずされ、「個人」のすべてに判断が託されてしまつたこととはどういふことか、そして、どのような苦しみを感じるようになったのかを、傍線部以降の段落をよく読み、まとめる。

問四 接続詞の問題は、空欄の前後の文脈をよく読んで選び、選んだ答えを空欄に代入して、文の意味の流れを再度確認することが大切。

問五 近代以降の「何をするのも、何を信じるのも自由」な時代は「つらいもの」であり、それと対比的な、近代以前の「信仰が生きていた時代」はどのような状態だったかという問い。近代以前の時代について述べられている文章前半の六段落目に、「非常に幸せな状態」とあり、これが正解の根拠となる。

問六 一文をよく読み、「何の意味」を「何」が供給するののかということを考える。本文中で、筆者は近代以前の世界では「人生の意味」や「ものごとの意味」を「宗教」が与えてくれたという説を展開していることに注目。七段落目に、「こうしたことに対して、自分のまわりの世界のほうが、あらかじめ答えを用意してくれていたのです。」という、一文の言い換えにあたる表現があり、この直後に問いの一文を入れると、正解が導き出される。